

令和6年度 データサイエンス・AI リテラシー教育プログラム 自己点検・評価(短大版)

評価日時: 令和7年3月26日

開催場所: 武庫川女子大学中央図書館棟

目的: 令和6年度の「データリテラシー・AIの基礎(リテラシー教育プログラム)」の自己点検・評価

評価項目: 文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」

自己点検・評価の視点	内容	点検・評価結果
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況	令和6年度は、前期に英語キャリア・コミュニケーション学科の2年生20名、後期は幼児教育学科、食生活学科、生活造形学科の1年生90名が履修し、単位修得率は87.7%であった。「データリテラシー・AIの基礎」では、全15回の講義で確認テストを課し、LMS (Google Classroom)に蓄積されたデータから個々の学生の課題提出状況や理解度を週単位で把握し、理解度が十分ではない学生に対しては再テストを課した。また、出席状況に応じて「データサイエンス学習支援ルーム」から学生に連絡をとることに加え、各学科の共通教育委員・クラス担任との連携で当該学生の状況を把握し、継続的な履修を支援した。卒業学年の学生については必要に応じて面談を行い、単位修得に向けた支援を行った。	今年度の単位修得率は昨年度より約3%減少している。個々の学生への連絡に加え、学科との連携や卒業学年の学生に対する面談を実施するなど、継続的な支援が行われているが、今後も単位修得に向けた対応を実施していくことが必要である。具体的に来年度の再履修生は卒業学年になることから、単位修得に向けた面談を全員に課すなどの対応策が必要である。
学修成果	「データリテラシー・AIの基礎」では、毎回、授業内容の理解度、教材や課題の適切性についてアンケート調査を行った。また、学内の教務システムを利用した授業アンケートでは、オンデマンド授業で自分のペースで取り組むことができた点をメリットとして挙げた学生が多く、Excelを使った実践的な学びや、将来社会で生活するために必要となるAIやデータサイエンス領域の知識やスキルを学習できたことが成果として挙げられていた。	アンケート結果より、概ね高い評価が得られているが、授業の復習をするための確認テストの返却方法に改善の余地があるため、来年度は学生の要望を踏まえた対応を期待する。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	前項に記載した毎回のアンケート調査において、授業の理解度は概ね7割前後の学生が「よく理解できた」、「だいたい理解できた」と回答している。しかし、各回の授業内容によって回答にばらつきがあり、特に「データ活用とは」および「2つのデータの関連性」に関する授業の理解度は低い傾向があった。また、課題の難易度は適切であるとの回答が大半であり、確認テストの正答率が7割を下回った問題が令和5年度は全体の18.4%だったのに対し、令和6年度は15.0%に減少した。	授業内容の理解度については例年通りの評価が得られているが、各回の理解度にはばらつきがあるため、引き続き理解度の向上に向けて教材の改善を期待する。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	「データリテラシー・AIの基礎」は全学必修科目であるため、本学の入学者は全員受講することになる。短大の履修生について、来年度以降は基本的に再履修生になる。	—
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	令和3年度より、本プログラムの授業科目「データリテラシー・AIの基礎」は全学必修科目として開講しており、同年度以降の入学者はすべて本プログラムを履修している。	全学必修科目として4年目が終了し、概ね順調に推移しているが、今後は再履修学生の単位修得率を向上させる方を検討する必要がある。
学外からの視点		
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	プログラム修了者の進路について、効果測定が可能であるが、卒業生の活躍状況について、企業等からのヒアリングはできておらず、今後は令和5年度以降の卒業生の進路状況について調査を行っていく。	卒業生の進路について、就職先に変化が見られたのかどうかをキャリアセンターと連携しながら調査・検証を行っていく必要がある。また、卒業生は全員が修了者であることから、卒業時アンケートの結果等を踏まえて多面的な評価を行っていく必要がある。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	生成AIが想定以上のスピードで世の中に浸透している、また、データサイエンスを学ぶことができる大学が増えている現在において、産業界はどのような人材を必要としているのか、今後企業に対してアンケートやヒアリングを行い、授業内容に反映していく予定である。	産業界との連携は引き続き課題として残っている。令和7年度の共通教育カリキュラム改革における有識者会議の場などを活用して、産業界の要望を踏まえた教育プログラムとして発展させていくことが期待される。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	昨年度同様に後期の全学実施に向けて、前期の「初期演習Ⅰ」では本科目の概要を紹介する導入講義を実施し、本プログラム(科目)の目的や目標、データサイエンスやAIについて学ぶ意義の理解を促した。また、共通教育サイトの「専門分野の学びとデータサイエンス」では、学科の教員が専門分野と本科目で学ぶ内容とのつながりを説明しており、学生がより興味・関心を持ち、学ぶ意義が理解できるようにしている。	後期の授業に向けて前期の時点から、本科目の概要を紹介する導入講義を実施していることは評価できる。また共通教育サイトで学科の教員が専門分野との関連を述べているなど、学生が学ぶことの意義を理解できるように工夫されている。今後も多様な学科の学生が受講する上で、「学ぶことの意義」を伝え、学生の受講動機をさらに向上させる取り組みを実施することが期待される。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	一部の授業回において、理解度が低い傾向がみられるため、今後も「分かりやすい」授業をめざして改善を図っていく必要がある。	全学必修科目であるため、授業の内容と水準の維持・向上は今後も大きな課題となる。オンデマンド授業であるため、基礎学力の面だけではなく、主体的に学習に取り組む姿勢が求められるため、各学科との連携をさらに強化しつつ、「データサイエンス学習支援ルーム」での面談で学生の状況を把握することが必要である。